

ふれあい灘

令和：6年3月20日 第44号
 発行：灘ふれあいのまちづくり協議会
 委員長 伊集院 定義
 編集：広報部会
 題字：橘 香陽

都賀・河原地区の皆様、平素は防災活動にご協力いただき有り難うございます。御承知のように、令和六年一月一日、午後四時十分、最大震度七の地震が石川県能登半島で発生しました。元且を迎え、今年も平穩無事で過ごせますようにと祈念した矢先のことでした。希望に満ちた新年のすがすがしさに、無情にも地震が町を倒壊させ、町の産業や市民の日常生活すべてを奪い去ったのです。漁港や海辺では、地盤の隆起や津波による被害も報道されています。カメラの前で何重苦にも耐えながら気丈に振る舞っておられる被災者の皆さんの心情は、二十九年前の阪神淡路大震災を経験した私達には痛いほど理解できます。とてもよそ事とは思えません。被災された皆様に心を寄せ一日も早い復興を願っています。



《助け合っまちに》

都賀防災福祉コミュニティ
 本部長 大下 政一

昨年来、都賀地区・河原地区各防災福祉コミュニティが会合を重ねて立案した合同防災訓練が、今年一月十四日(日)に灘小学校校庭で実施されました。灘消防署・灘消防団・灘区役所・灘小学校・灘ふれあいのまちづくり協議会・近隣自治会・婦人会などに協力して頂き、地域ぐるみで実施できました。能登半島の地震後ということもあって、多くのご家族が参加してくれましたが、皆さん真剣そのものでした。

訓練の概要は、参加者を三ブロックに分けて体験してもらいました。第一ブロックでは初期消火訓練を行いました。ご近所が風呂の水などを持ち寄って集中的に火元を消火する想定のパケツリレーや消火器の使い方や煙からの脱出訓練も行いました。第二ブロックでは、防災倉庫常備の救出資機材の使い方や負傷者の搬送訓練を行いました。子供たちが一番興味を持ってくれたのがこの訓練です。機材を使ってみたい、救急搬送のタシカを担いだり、けが人の役を演じてくれたり賑やかでしたが、いい経験



験をしてくれたのではないのでしょうか。第三ブロックでは、応急手当訓練としてAEDを使った心肺蘇生の訓練を行いました。訓練後半は、防災講話、保存食の試食(レトルトカレー)で予定を終了しましたが、初回としては充実した内容でした。

この訓練の二週間前に発生した能登半島地震に改めて思うことは、先ず自分の命は自分で守る(自助)、そしてお互いが助け合う(共助)、地域行政には限界があること、国の援助(公助)が入るまで時間を要することをもう一度肝に銘じておく必要があります。

何よりも大切なことは、地域が普段から助け合って被災に繋がることです。今後も都賀・河原地区の防災福祉コミュニティは、出来ることは協力し合って地域の防災力を高める活動を続けていきたいと考えております。

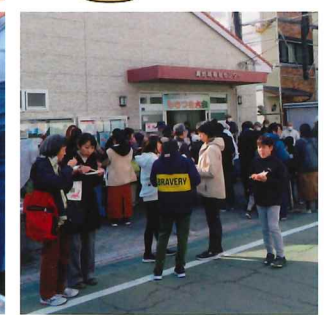
12月



10月



2月



11月



編集後記

阪神淡路大震災から二十九年目となる、同じ一月の元日に能登地方において大震災が起き、震災時の事を思い出されたことでしょう。今年が多難な年にならないかと心配です。

さて、今回のふれあい灘において、河原、都賀との合同での防災訓練が行われたことについて、詳しく報告されたこと共に、地域の学生さんの「社会を明るくする運動」への参加作文を掲載することが出来本当にうれしく思います。会の活動の写真を見ていただき、多くの人に参加して頂きます事を心からお待ちしています。「谷」

【令和六年度総会のお知らせ】

◆六月九日(日) 定期総会 十時～
 灘地域福祉センター

《早春を彩る花》

沈丁花は、香りのよい花を早春に咲かせる常緑樹の花木です。微かに嗅ぐその香りを通して春の近さを感じませんか。



《挨拶をする意味》

鷹匠中学校三年 森田 心葉 このは

「挨拶は礼儀」小さいころからそう教えられてきた。家族、地域の方、学校の先生、私の事を知らなくても挨拶をしてくれた人へ、礼儀だから挨拶をする。するといつの間にか、挨拶をする理由を考えることがなくなつた。私を知っている人なら私から挨拶をすればいいし、たとえ知らない人でも挨拶をされたら挨拶を返したらいいと思つていた。ただ礼儀だからという理由で挨拶をする私。それは本当に気持ちが届められているのだろうか。



小学生の時、友達と喧嘩をした。きっかけは些細なことだったが、その頃の自分にとつては大切なことだった。口論して、明日合わせる顔がなく、学校に行きたくないと思うほどだった。泣きながら帰つたあの日、声をかけてくれたのは知らないおばあさんだった。おばあさんは優しく「こんにちは。何があつたの。」と私の話を聞いたあと、口を開いた。



「明日学校あるんだよね。その子ともう一度話してみたらどうだい。」すごく穏やかな声だった。続けて、「何も考えなくていいさ。」

《思ひを母と共に》

灘区下河原通四丁目 F・H

一昨年八月に九十六歳で旅立つた母は、大正・昭和・平成・令和の四つの時代を気丈に生き抜いてくれました。何事にも器用な



人で特に料理や編物は独自の感性で素晴らしい作品を作り上げて家族初め周囲の人たちを心底喜ばせてくれました。それが自分の楽しみでもあり生き甲斐のように次々と新しい発想で新作に挑戦していた姿を昨日のことにように思い出します。他人の何倍も苦勞を重ねてきた母ですが、いつも何事にも前向きで若々しくおしゃれ心を忘れない明るい性格の持ち主でした。この母の生きる姿勢を見ながら友人は、

「決心したと胸の内を語ってくれたことがあります。また、昔から苦勞を知っている幼馴染の一家は「苦勞の達人」という別名を付けて呼んでくれていました。私は親孝行も恩返しも何も出来ずに見送つてしまいました。今は、残された時間を悔いなく完全燃焼させるこ

挨拶をすればいいんだよ。おはようって。挨拶はね、人を笑顔にさせるんだよ。どんなに辛いことがあつても挨拶すれば心が繋がる。きっとその子とも上手いくさ。」私はその言葉がすごく心に響いて救われた気持ちになつた。礼儀のために挨拶をするのではない。挨拶は人を笑顔にさせるコミュニケーションである。

翌日、私はその子に「おはよう、昨日はごめんね。」と伝えることができた。その子も「おはよう、私こそごめんね。」そういった会話を交わした後、仲直りすることができた。そしてまた私たちの間に笑顔が戻つた。挨拶の力は凄い。人を笑顔にさせるのだから。おばあさんの言葉があつて私は挨拶をする本当の意味を理解することができた。この出来事がない限り、私は礼儀のために挨拶をする人になつていかもしれない。私の話を聞いてくれた人、挨拶をする意味を教えてくださいましたから私は今、気持ちよく挨拶をするこ

とができています。世間には毎日のように悲しいニュースが流れている。その人はどんな思いを抱えていたのか。自分の変化に気づいてくれる人はいたのだろうか。挨拶は人と繋がる言葉。誰かが、「おはよう」そう言ってくれるだけで、ほつと心が安らぐ。挨拶はする



とがせめてもの供養のひとつと考えています。母が生きてきた時代は、昭和十三年の大水害、青春時代を奪われた悲惨で長く続いた戦争、当たり前だと思つていた日常が一瞬で崩れ落ちたあの阪神淡路大震災。次々と襲ってくる惨状の中でも母親世代の人たちの精神力は、逞し過ぎるパワーを発揮し過去の体験を活かし見事に乗り越え私達に手本を残してくれました。そんな母との思い出は数限りなく有り、何を見ても何処へ行つても懐かしさで胸は一杯になつてしまいます。

先日、お墓参りの帰り道阪急六甲駅横の踏切で信号待ちをしていた時、突然ある出来事の記憶が蘇ってきました。それは、母がお世話になつていた老健施設に毎日のように通つていたある日の帰りのバスから見た光景です。この踏切を渡ろうと高齢の女性が入つたものの渡り切れずに遮断機が下りてしまいました。あと一歩という状況だったけれど、何度も出ようと試みるものの遮断機はビクとも動かない状態でした。そんな時バイクに乗った女性が急停車して高齢女性を引き摺り出してくれたのです。その後、何事も無かつたかのように電車は勢いよく通過していきました。「良かった！」と心の中で拍手を送つたものの当時なら母もこの様な事態に遭遇する可能性は十分考えられま



側もされる側も自然と笑顔になれる。そして気持ちも上向きにしてくれるのだ。私たちがする何気ない挨拶が誰かの気持ちを变えるきっかけとなつていたり、安心できる一言になつていくのかもしれない。私は今、毎日挨拶をするときにやりがいを感じている。短い言葉だけでも大切なコミュニケーション。私はこれから、気持ちを込めて挨拶をしていきたい。そして挨拶によつて誰かの居場所を作れる、そんなすてきな人になりたい。



【第73回社会を明るくする運動「作文コンテスト」】
令和5年度に実施された第73回社会を明るくする運動「作文コンテスト」は、全国から306,302点（小学生127,880点、中学生178,422点）の応募がありました。最優秀賞（法務大臣賞）を受賞したのは小学生の部では山梨県の高梨 詩楠（たかなし うたな）さん、中学生の部では鹿児島県の角川 凜（かぐわりん）さんでした。
作文コンテストは、次代を担う小・中学生の皆さんに、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、犯罪や非行に関して考えたことや感じたことをいきいきと書いてもらうことを通して、社会を明るくする運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。

した。ひとつの踏切を渡り切るのも命懸けの高齢者の姿を目の当たりにし、高齢者のみならず幼児や全ての人たちにも当てはまる大きな社会問題だとこの時痛感した出来事でした。安心・安全な生活環境が一日でも早く実現でき、穏やかな日常生活を過ごせるようになって欲しい。この踏切に立つ度に今も母との思い出と共に忘れられない出来事のひとつになつていきます。



疾風に勁草を知る

「後漢書」王霸伝から

「疾風」は激しく吹く風、「勁草」は強い草のことで、激しい風が吹くことによつて、それに負けない強く丈夫な草が見分けられることから、困難に直面した時に初めてその人間の本当の強さや価値がわかるという意味。



【疾風】
・激しく吹く風。はやて。
・風速毎秒8.0〜10.7メートルで風力階級5の風。